

## 米国農務省「世界農業需給予測(WASDE)」による 飼料穀物(トウモロコシ、ソルガム、大麦)需給概要の抜粋

以下に2014年1月10日米国農務省発表の世界農業需給予測の米国産飼料穀物に関する部分の抜粋の参考和訳を以下に掲載いたします。WASDE のフルレポートについては (<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>) よりご確認ください。また、数値や内容については、原文のレポートのものが優先いたします。各項目の詳細、注釈についても原文をご参照ください。

米国産飼料穀物の2013/14年度の供給は、トウモロコシとソルガムの生産量予測が減少したため下方修正されています。トウモロコシの収穫面積は436,000エーカーに引き上げられましたが、予測単収が158.8ブッシェル / エーカーへと1.6ブッシェル / エーカー引き下げられたため、生産量は6,400万ブッシェル減少の139億ブッシェルとなっています。ソルガムの収穫面積が148,000エーカー引き下げられ、単収が2.6ブッシェル / エーカー引き下げられたため、生産量は2,700万ブッシェルとなっています。

トウモロコシの2013/14年度の利用は、飼料そのほか向けの利用量が9月から11月消費量に基づいて1億ブッシェル上方修正されています。トウモロコシのエタノール製造向け利用は、引き続き旺盛なエタノール製造量、ソルガムのエタノール製造への利用減、そして2014年のガソリン消費予測が引き上げられたことから、5,000万ブッシェル引き上げられています。食品、種子、産業用利用の5,000万ブッシェル減によって、このエタノール向け利用の増加が相殺されています。2013/14年度のトウモロコシ期末在庫予測は1億6,100万ブッシェル減の16億ブッシェルの予測です。2013/14年度のトウモロコシの農家出荷平均価格は、中点に変更はなく、その範囲は \$4.10から \$4.70/ ブッシェルと狭くなっています。

そのほかの2013/14年度の飼料穀物供給の変更としては、飼料そのほか向け消費予測におけるソルガムとオーツの増加と大麦の減少があげられます。ソルガム輸出は9月 / 11月の消費増により輸出向け供給が限定されたため、2,000万ブッシェル減と予測されています。ソルガムの食品、種子、産業利用も2,000万ブッシェル引き下げられています。

トウモロコシ	2011/12	2012/13推定	2013/14予測(12月)	2013/14予測(1月)
作付面積(百万エーカー)	91.9	97.2	95.3	95.4
収穫面積(百万エーカー)	84.0	87.4	87.2	87.7
単収(ブッシェル)	147.2	123.4	160.4	158.8
<b>期首在庫(百万ブッシェル)</b>	<b>1,128</b>	<b>989</b>	<b>824</b>	<b>821</b>
生産量(百万ブッシェル)	12,360	10,780	13,989	13,925
輸入量(百万ブッシェル)	29	162	30	35
<b>総供給量(百万ブッシェル)</b>	<b>13,517</b>	<b>11,932</b>	<b>14,842</b>	<b>14,781</b>
飼料そのほか(百万ブッシェル)	4,557	4,335	5,200	5,300
食品、種子、産業用(百万ブッシェル)	6,428	6,044	6,400	6,400
エタノールと併産物用(百万ブッシェル)	5,000	4,648	4,950	5,000
総国内消費量(百万ブッシェル)	10,985	10,379	11,600	11,700
輸出量(百万ブッシェル)	1,543	731	1,450	1,450
<b>総使用量(百万ブッシェル)</b>	<b>12,528</b>	<b>11,111</b>	<b>13,050</b>	<b>13,150</b>
<b>期末在庫(百万ブッシェル)</b>	<b>989</b>	<b>821</b>	<b>1,792</b>	<b>1,631</b>
平均農家出荷価格(ドル/ブッシェル)	6.22	6.89	4.05 - 4.75	4.10 - 4.70

ソルガム	2011/12	2012/13推定	2013/14予測(12月)	2013/14予測(12月)
作付面積(百万エーカー)	5.5	6.2	8.1	8.1
収穫面積(百万エーカー)	3.9	5.0	6.7	6.5
単収(ブッシェル)	54.6	49.8	62.2	59.6

ソルガム	2011/12	2012/13推定	2013/14予測(12月)	2013/14予測(12月)
期首在庫(百万ブッシェル)	27	23	15	15
生産量(百万ブッシェル)	214	247	416	389
輸入量(百万ブッシェル)	0	10	0	0
総供給量(百万ブッシェル)	242	279	431	404
飼料そのほか(百万ブッシェル)	71	93	100	125
食品、種子、産業用(百万ブッシェル)	85	95	120	100
総国内消費量(百万ブッシェル)	156	188	220	225
輸出量(百万ブッシェル)	63	76	180	160
総使用量(百万ブッシェル)	219	264	400	385
期末在庫(百万ブッシェル)	23	15	31	19
平均農家出荷価格(ドル/ブッシェル)	5.99	6.33	3.75 - 4.45	3.90 - 4.50

大麦	2011/12	2012/13推定	2013/14予測(12月)	2013/14予測(12月)
作付面積(百万エーカー)	2.6	3.6	3.5	3.5
収穫面積(百万エーカー)	2.2	3.2	3.0	3
単収(ブッシェル)	69.6	67.9	71.7	71.7
期首在庫(百万ブッシェル)	89	60	80	80
生産量(百万ブッシェル)	156	220	215	215
輸入量(百万ブッシェル)	16	23	25	25
総供給量(百万ブッシェル)	261	304	320	320
飼料そのほか(百万ブッシェル)	38	59	75	65
食品、種子、産業用(百万ブッシェル)	155	155	155	155
総国内消費量(百万ブッシェル)	193	214	230	220
輸出量(百万ブッシェル)	9	9	10	10
総使用量(百万ブッシェル)	201	223	240	230
期末在庫(百万ブッシェル)	60	80	80	90
平均農家出荷価格(ドル/ブッシェル)	5.35	6.43	5.70 - 6.30	5.75 - 6.25

## 低脂肪 DDGS の暫定値にかかる告示改正について

アメリカ穀物協会では、最近の DDGS (ジスチラーズグレイ  
ンソリュブル)の油分抽出に伴って生産される油分の低い(お  
おむね7~11%) DDGS に関する暫定値を農林水産省に申請  
いたしました。申請に基づいて農林水産省より農業資材審議  
会に諮問がなされ、平成25年11月12日に開催された農業資  
材審議会飼料分科会飼料栄養部会(家畜飼料)で審議が行  
われた結果、同日以下の通り農林水産大臣に答申されました。

本答申に基づく告示の改正は平成26年3月を目処に行われ  
る予定です。また、この答申に関して(一社)日本科学飼料協

会より平成25年12月17日に会員に向けて、「告示改正後に暫  
定値を用いた栄養価の算出が可能になりますが、新たに栄  
養価が設定された飼料原料を用いるための飼料設計の見直  
し等には相当の時間を要するため、暫定値の取り扱いにつ  
いて農林水産省消費・安全局畜水産安全管理課より、農林水  
産省のホームページに公開された答申内容に基づいて飼料  
の切り替え等の準備を進めることが可能であり、告示改正前  
に答申内容に基づいて飼料設計の見直し等の準備を開始で  
きます」という旨の事務連絡が発出されています。

原料名	畜種	栄養価(現物中)			消化率				代謝率	備考
		TDN (%)	TDN (%)	ME (Kcal/kg)	粗たん白質	粗脂肪	可溶無窒素物	粗繊維		
トウモロコシジスチ ラーズグレイソリュ ブル	鶏	89.1	—	2,490	—	—	—	—	53.5	燃料用アルコールの副産物を乾燥したものであって、粗脂肪含量が7~11%となるよう シンスチレージから油分を除去したものであること。栄養価は、暫定的に定めたものであ る。
	豚	89.1	72.8	—	88	83	66	58	—	
	牛	89.1	78.4	—	85	91	78	57	—	

## 空飛ぶ豚と海を渡るトウモロコシ

アメリカ穀物協会から資料提供させて頂いた書籍、『空飛ぶ豚と海を渡るトウモロコシ』（三石誠司著、日経 BP コンサルティング発行 ISBN978-4-901823-87-6）の本文を、少しずつご紹介いたします。

日本は年間1600万トンという世界最大のトウモロコシを100%輸入する国です。そこには国や企業の都合ではなく、米国の生産者の「日本に届けたい」という思いが込められていました。私たちの食料、世界の食料、未来の食料について考えるヒントとなる書です

### ■フードシステムを徹底的に検証し、早急に対策を

最後に第3として、個別企業の経営者および行政担当者への教訓は極めて明確であると思います。既存のフードシステム、とくにサプライチェーンの中でどこが最も脆弱であるかを、国内外の事例を含めて徹底的に検証し、早急に対策を講じることが求められています。

そして、その際、「何をすべきか」だけでなく、「何をしてはいけないのか」を、過去の教訓を基にしっかりと整理することではないでしょうか。

復旧と復興の定義を云々する気はありませんが、欠点や脆弱性を抱えたものをそのまま元に戻して良い訳がありません。その意味で、学者や研究者はこれまでに行われてきた開発やフードシステム全体の問題点を洗い出し、早急に実効可能性ある対応策を提言していく社会的な責務があるということ、本章の最後に、自省を込めて記しておきたいと思います。

注1 「全国地質調査業協会連合会」HP、<http://www.zenchiren.or.jp/tikei/index.htm> (2011年7月3日閲覧) (71号掲載)

注2 寺田寅彦「天災と国防」『寺田寅彦』(筑摩書房、2010年版)、440～441ページ(71号掲載)

注3 日本フードシステム学会2011年度大会において、筆者の同僚である宮城大学の川村保教授が「震災後の食料供給における個人商店の役割—仙台市内での経験より」として個別発表を行っている(74号掲載)

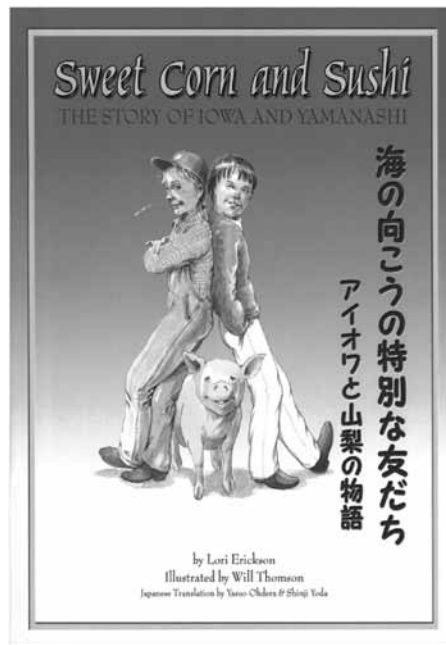
## 2. 「空飛ぶ豚」からトウモロコシへ

### ■「空飛ぶ豚」

「遠くはなれた、たくさんの違いのある、二つの美しい土地それぞれに、誇り高い人々が住んでいました。これは、その人達の間をめばえ、大きく花開いた、すばらしい友情の物語です」

この書き出しで始まる1冊の美しい本は、『スイートコーンとシーアイオワと山梨の物語(Sweet Corn and Sushi - The Story of Iowa and Yamanashi)』というユニークなタイトルの絵本です(次ページの写真)。ローリー・エリクソン(Lori Erickson)という方が書いた本で、インターネット上で閲覧することもできます。30ページ程度の絵本ですので、本書を読まれた方は、是非一度、見ていただきたいと思います。(http://www.myfood.jp/ebook/top.html)

率直なところ私自身、この本を読むまでは、日本と米国の姉妹県の第1号が山梨県であるということを完全に失念していました。かつて米国アイオワ州を訪問したときに、絵本の中にも登場する有名な「友好の鐘」を見て、一度は納得し理解したはずなのですが、毎日の忙しさの中で心のどこかにこうした大事なことを置き忘れたままになっていたのかもしれない。本当に恥ずかしい限りです。



アイオワ州と山梨県の友情を描いた絵本

今回、食料問題における「無意識の当たり前」を見える形でまとめるに当たり、日本と米国の飼料穀物取引における相互協力に関する歴史は、是非とも盛り込むべき話であると思いました。そうであれば、「ホッグ・リフト(Hog Lift)」の話を除外的訳にはいきません。なぜならば、現代の日本では、米国との関係を考えるときに、こうした地道な相互協力の歴史を無視したままで、目の前の現象だけを見て、○×か、イエスかノーかのような議論が行われていることが多いからです。

米国と日本を話をするときに中国の話を出すのは変だと思われる方もいるかもしれませんが、ここで「飲水不忘掘井人」という中国の故事成語を紹介したいと思います。これは、水を飲むときには最初に井戸を掘った人の苦労を忘れてはならないという意味です。どちらがどちらに恩を売ることではなく、相手が困難な状況にあるときに、お互いのできる支援をしていこうという純粋な気持ちと行動、これが結果的にはよい関係が一番長く続くことになるのではないのでしょうか。では、少しエリクソンさんの本の内容に触れながら、何があったかを見ていきたいと思います。

### ■何が自分のできる「復興支援」か—山梨県の台風被害と豚の空輸

2011年の夏から秋にかけての台風で西日本は大きな被害を受けましたが、今から約半世紀前の1959年にも、伊勢湾台風をはじめとした台風は、日本各地に大きな被害をもたらしました。米国と日本の戦争が終了したのが1945年です。その後、15年近くを経て両国は様々な形で生活を立て直してきましたが、この年の台風は日本各地に大きな被害をもたらしたのです。



アイオワ州が山梨県を「ホッグ・リフト」で支援したお返しに、山梨県がアイオワ州に贈った「友好の鐘」  
写真提供：山梨県国際交流課

当時、日本在住の米国空軍に勤務していたリチャード・トーマス(Richard Thomas)曹長という方がいました。トーマス曹長は、山梨県の被害が甚大であることを知ると、何が自分に可能な「復興」支援かを考えたようです。トーマス曹長は当時の米国でも養豚の大生産地であったアイオワ州の出身でした。そして、台風で被害を受けた山梨の畜産農家を助けるために、アイオワ州から豚を送ろうと考えたのです。

豚を表す英語は沢山ありますが、成長した豚のことはホッグ(hog)と言います。これに対して子豚のことはピッグ(pig)、そして、豚全体を表すときにはスワイン(swine)という単語を使います。

より厳密に言えば、ここで送られた豚は繁殖豚であり、繁殖豚にもオスとメスでそれぞれ異なった呼び方があるのですが、これ以上はあまりにも専門的になるため割愛します。もしかしたら、皆さんの中には豚と聞いて「ポーク(pork)」という単語を思い浮かべる方がいるかもしれませんが、ポークはあくまでも豚肉のことです。

さて、アイオワ州の豚(hog)を飛行機で日本に送る。これは現代でこそ、「ああそう」ですむ話かもしれませんが、50年前の両国の間では一大プロジェクトでした。今でも伝説の豚の空輸計画ということで知られ、「ホッグ・リフト(hog lift)」と言われています。「ホッグ・リフト」とは、さしずめ「空飛ぶ豚」といったところでしょうか。



「ホッグ・リフト」を実現させた米国空軍機

### ■米国空軍機で日本にやってきた36頭の豚

トーマス曹長は米国空軍勤務でしたので、この計画を在日米国大使館の農務担当官に相談して了解を得た後、今では信じられないかもしれませんが、何と米国空軍が軍用機を提供して豚を空輸することに同意してくれたのです。判断というのはまさにこういうことを言うのだと思います。

ところで、現在、アメリカ穀物協会(U.S. Grains Council)という組織があり、その事務所が日本にもあります。この組織は米国農務省海外農務局(United States Department of Agriculture Foreign Agriculture Service)と協力して米国産穀物の海外輸出を促進するための様々な活動を行っていますが、この「ホッグ・リフト」の経験が同協会の基盤づくりに役立ったことは言うまでもありません。それは後ほどまた述べたいと思います。

さて、問題の豚ですが、当時は貨物輸送用のジェット機がなかったため、米国空軍の貨物機を用いて、各地を経由しつつ大変な苦労をしながらの輸送であったようです。アイオワ州から好意によって寄贈された36頭の豚は、特別製の木箱に入れられただけでなく、重要人物のように専門のエスコートが付き添い、熱でやられないように途中で何度も水を浴びせられながら、アイオワ州の州都デモインから3日もかけて日本に到着したと言われています。

(次号に続く)

ネットワークに関するご意見、  
ご感想をお寄せ下さい。



**U.S. GRAINS COUNCIL** アメリカ穀物協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1丁目2番20号  
第3虎の門電気ビル11階

Tel: 03-6206-1041 Fax: 03-6205-4960  
E-mail: grainsjp@gol.com

本部ホームページ(英語): <http://www.grains.org>  
日本事務所ホームページ(日本語): <http://grainsjp.org/>